

新入学児童における平仮名の読み能力の発達に関する研究

—半年間の追跡調査による学習障害（LD）児の早期発見の試み—

15014PCM 三澤 周子

I. 問題と目的

平仮名とは日本では最初に習う文字であり、未就学児でも既に読み書きが出来ている児童も少なくない。しかし、識字の定着が早い子どもがいる一方で、定着が遅い児童も少なからず存在する。どんなに時間をかけても困難を示す児童がおり、そのような児童は学習障害（以下、LD）であると考えられる。

LDの判定にはディスクレパンシーモデルが採用されているが、学習に著しい躓きが生じた後に判断が行われるため、早期の気づきや支援が遅れてしまうことがある。そこで代わりとなるモデルとして、海津他（2010）が多層指導モデル Multilayer Instruction Model(以下、MIM)を開発した。

MIMは、児童の学習が躓く前、または躓きが深刻化する前に指導・支援することを目指しており、基本的には3層構造のモデルになっている。1stステージでは、通常の授業を全ての児童に対して実施する。2ndステージでは、通常の授業に加え、1stステージのみでは伸びが十分ではない児童に対して、通常の学級内で補足的な指導や配慮を実施する。3rdステージでは、2ndステージの指導を経ても、伸びが乏しい子どもに対して、通常の学級内外において、補足的、集中的に柔軟な形態による、より個に特化した指導を行っている。

MIMの中で重要な役割を担っているのがMIM-PM (Multilayer Instruction Model-Progress Monitoring)である。これは、全ての学習領域に影響し得る早期の読み能力、特に特殊音節の正確で素早い読みに焦点を当て、計2分で実施するテストで「絵に合うことばさがし」と「3つのことばさがし」の2つから構成されている。MIMの全体から段階を踏んで、対象を絞っていく考え方は、困難を示す児童を見つけるだけでなく、全体の児童も見ることが出来、児童がど

のように発達していくか変化を確認できると考える。また、比較することにより、困難を示す児童の苦手な部分や周りと比べての伸びの乏しさも確認できると推測する。

以上から本研究では研究Iとして、MIMのアセスメントプロセスを参考に、新入学児童に対して平仮名の読み学習の困難について実態調査を行い、学期間での発達の経過を明らかにする。また、研究IIとして、読み学習に困難を示した児童の中でも知的発達に遅れはないが、読み学習の発達が見られない児童をLDの可能性があるととらえ、早期発見が可能であるかの検証を目的とする。

II. 研究I

1. 方法

1) 研究協力者：A市立のB小学校（5クラス）の新入学通常学級児童計166名（男子80名、女子86名）。

2) 調査時期：第1回目は平成28年7月1日実施。第2回目は平成28年12月2日実施。

3) 調査内容

a) 第一段階：一学期

i) 担任教諭による通常授業による学習を行った。
ii) 一学期のうちで平仮名の読み書きに対して困難が見られる児童生徒を担任教師からの聴取によりリストアップをした。

iii) 7月初めに「ひらがなチェック表」、「MIM-PM」を筆者が行い検討を行った。

b) 第二段階：二学期

a) により、リストアップした生徒18名を「気になる児童」として通常の学級内の国語の時間に、担任教諭の指導の下、筆者が学習指導員(ボランティア)として、補足的な学習支援を行った。

c) 第三段階：12月初め

再度、一回目の調査と同じ内容の「MIM-PM」を行い、2回の調査と半年間の継続的な関わりで得た情報も含めて比較を行った。

2. 結果

表1 調査2回の平均値, SD, 最高点, 最低点

	1回目				全合計
	ひらがな表	絵に合う	3つの言葉	MIM合計	
平均(SD)	28.02(2.15)	6.88(3.88)	5.03(3.69)	11.92(6.97)	39.93(8.01)
最高値	29	20	17	37	66
最低値	13	0	0	0	17
N	164	164	164	164	164

	2回目		
	絵に合う	3つの言葉	MIM合計
平均(SD)	11.22(4.38)	8.56(3.95)	19.78(7.69)
最高値	28	22	48
最低値	1	0	4
N	159	159	159

2回分の平仮名調査の平均値, SD, 最高点, 最低点を表1に記した。1回目の調査では, 全29問からなる「ひらがなチェック表」の全問正解者の割合は65%であった。MIM-PMの2回の調査の平均の差は $t(321)=9.66$, $p<.01$ で有意な差であった。このため, 読みの能力は伸びていると考えられる。

また, 調査の全合計で31点以上の点数をとった生徒の割合は89%であった為, 今回は31点以上は問題なしと捉えた。30点以下の児童は全体の11%を占めており, 児童全体の平均(SD)の39.93(8.01)に対してほぼ-1SD以下となる。このことから, 本研究では, 1回目の調査の全合計が30点以下の18名を「気になる児童」として経過観察した。

研究II

1. 方法

1) 研究協力者

研究1でリストアップされた「気になる児童」で調査を2回とも受けた新入学通常学級児童計17名

2) 調査時期

平成28年9月~平成29年1月

3) 調査内容

研究Iでリストアップした「気になる児童」の中でも2回の調査間で読み能力の発達があまりみられない児童について, 文部科学省の「児童・生徒理解に関するチェック・リスト」を担任教諭に記入してもらった。その結果と授業の様子からLDの疑いがあるかを検討した。

2. 結果

表2 17名の群分けとMIMの結果

	2回目の			結果
	人数	MIM-PM合計	MIM-PM2回目	
1群	8名	12~21	8~21	改善がみられた
2群	4名	8~9	6~7	グレーゾーン
3群	5名	4~6	0~6	LDの可能性の疑い

17名のMIM-PMの結果を比較し, 3群に分けて表2に記した。1群の児童は8点以上も点数があがっていたため, 改善が見られたと判断をした。2群は十分な伸びではなくグレーゾーンであると判断し, 3群の児童には伸びが見られなかった児童がいたため, LDの可能性の疑いがあるとした。また, 2群3群の児童について文部科学省の「児童・生徒理解に関するチェック・リスト」の結果, 学習障害に関する「学習面」において疑いがあると判定が出た児童は2群中2名, 3群中3名であった。また, この5名は注意欠陥多動性障害に関する「行動面」でも疑いありの判定が出た。

4. 考察

研究Iでは, 2回の調査を比較したところ, 解答数や正答率が上がっており, 児童全体では定着が不十分な特殊音節もあるが, 読み能力は伸びているという結果となった。この結果については, 平仮名や片仮名を1回目の調査の時よりも習得し, 読むことや正解に判断することが早くなったという理由が考えられる。

研究IIでは「気になる児童」の中でも, 正答率やミス解答数の差から, 読み能力の伸びに差がみられた。1群の児童8名は「気になる児童」の中でも読み能力が伸びた児童達であり, 今後も伸びていく可能性が大きいと思われる。対して3群の児童は, 解答総数は増えているが, ミス解答数も増えていた。正答率も他の群などよりも低く, 読み能力の伸びが乏しいため, 3群の児童はLDの可能性が疑われる。

本研究では, 担任教諭からの聴取とアンケートに加え, 2回の調査と半年間の関わりにより, 第一段階では全体の11%であった「気になる児童」を2~3%まで絞ることができた。また, MIM-PMにより, その児童の苦手な領域を把握することが出来, その後の児童の支援や学習の手助けになると考えられる。